関口存男に見られる不定冠詞の本質（III）
Das Wesen des unbestimmten Artikels bei Tsugio Sekiguchi

上　田　　弘
Hiroshi Ueda

前書

本稿は金沢大学教養部論集人文科学篇31－1（1993年）に掲載の「関口存男に見られる不定冠詞の本質（II）の継続である。

10.不定冠詞

1. Das Kind *kam* von der Schule heim.
2. Das Kind kam, sich die Augen rot *weinend,* von der Schule heim.
3. Wir trösteten das *weinende* Kind.
4. Er ruht seine *müden* Glieder aus.
5. In der Altstadt gibt es *enge* StraBen.
6. Ein Mädchen, jung und schön, lebte in einem *ländlichen, kleinen* Dorf.

上掲各文の斜体部分は定形，分詞，〝どうなっている〟的形容詞及び〝どんな〟的形容詞である。或観点よりこの三者の間の共通点と相違点を比べてみたい。

定形は〝文章〟であることの形式面での保證である。文章とは叙述であり，（話し手にとっての）出来事・変化・動きである。だから定形は，述語であることの形式面での保證である，ということになる。それでは内容面での保證が別に存在するであろうか。いや，保證は必ずしも二重に要らない。一般に内容は定形（動詞）の中に含まれている。定形動詞の中に含まれている内容だけで不充分ならば，前綴や述補語によって補完される。Das Kind kam von der Schule heim. の kam が定形であり，従って述語および文章であることの保證である。だが定形（動詞）kam の中に含まれている内容〝来た〟だけでは不充分なので前綴 heim が内容を補完し，kam～heim で〝帰宅した〟という完全な内容を成す。

定形 kam が保證しているように，そこ（kam の内）に含まれているところの内容〝来た〟（もしくは heim を補って〝帰宅した〟）は述語である。ところで述語は主語なくして存在

できないことは第7項以降で見てきたとうりである。主語とは何か。以下第7項以降で見てきたことから拾い挙げれば，主語とは，対象化された主体，叙述化された沈黙，動き化された停止である。沈黙を表現するには発声しなければならぬが，どのような類の発声なら沈黙を表現することができるか。それは叙述の形をとることであった。叙述(則ち変動，対象）の形とは具体的に何か。それは名詞（代名詞を含む）という形である。だから主語になりうるのは（代）名詞だけである。その（代）名詞の特質を或意味でもっともはっきり覗い知ることができるのは，主語と述補語，つまり1格の場合よりもむしろ2格・3格・4格，つまり目的語のときである。1格と2・3・4格の間にはそれでは，名詞の特質という点でどのような相違があるのか。1格では主語と述語が二つの形に分かれているが，2・3・4格では分かれて居らず，いずれか一方が他方を内包している点である。Das Kind kam von der Schule heim. では1格 das Kind と述語 kam～heim が分かれているし，又 Er ist ein tüchtiger Mensch と言えば，1格（ist）ein tüchtiger Mensch と主語 er が二つの形に分かれている。1格はこのように主語と述語にはっきり分かれるということを，（果たしてどこまで適切かどうか判らないが）次のように表現することにする：das Kind（er も同じ）は百%主体（静止・沈黙）であり，（ist）ein tüchtiger Mensch は百%対象（変動・敍述）である，と。これに対して例えば3格目的語 der Schule は分かれて居ない。der Schule は定冠詞が冠置されているので〝主体〟である，がしかし〝対象〟も内に包含している。もしこれが Die Schule ist heute ausgefallen.（学校は今日は休みだった）という文であるならば，die Schule は〝対象〟を内に包含しておらず，〝対象〟であるところの ist～ausgefallen は，die Schule の外側に出てしまって居る。なお3格目的語 der Schule には定冠詞が冠置されているのでとりあえず〝主体〟であるが，もし不定冠詞が冠置されておれば逆に〝対象〟ということになり，且，主体はその対象の内に包含されることは云うまでもない。又無冠詞の場合は定冠詞の場合と同じである。さてこのように主体と対象の間で，〝一方が他方を内包する〟あるいは〝一方が他方の後に潜む〟ことを，あまり適切な表現とも思えぬが他に良い方法が思い付かぬため，仮に次のように表現する：der Schule 及び無冠詞では主体（は）百%（だが）対象（は）壱%（にすぎぬ），不定冠詞では逆に，対象は百%だが主体は壱%，と。 2・3・4格（目的語）のときに見られるように，こうして，〝いずれか一方が他方を内に包含する〟ことが名詞の最大の特質であると本稿に関する限り定義したい。以上は第7項より第9項前半にかけての論述の概略である。

（代）名詞が動詞や前置詞や形容詞の目的語のときに覗うことができるところの〝主体と対象のいずれか一方が，もう一方の後方に潜む〟ということが名詞の特質とするならば，定形はこの特質を変質させはしないか。例えば Sie wiegte das Kind in Schlaf.（彼女は子供を揺って寝かしつけた）においては，das Kind は4格目的語であってかつ定冠詞だから百%主体壱%対象である。つまり das Kind は主体であるが後方に対象が潜んで居る，とい

うことである。同じ das Kind がしかし Das Kind kam von der Schule heim. においては百%主体になっていないだろうか。4格目的語 das Kind の後方に潜む壱%の対象要素が定形 kam によって取り除かれた結果，das Kind は百%主体つまり主語になっている。定形 kam は則ち，das Kind が目的語であるが故に有しているところの名詞の特質を変質させ，das Kind を主語つまり百%主体に変えている。蓋し4格目的語 das Kind の後方に潜む壱%の対象要素を定形 kam が担うからである。

定形が目的語から対象要素を取り除いて自らの上に引き受ける結果，目的語を主語に変質させてしまうとすれば，分詞にも又同じことが云はれはしないか。Wir trösteten das weinende Kind において das weinende Kind はたしかに4格目的語である。しかし weinende と das Kind の関係は Das Kind weinte である。文章であることを保証して呉れる定動詞の形とちがい，weinende は分詞の形でしかない。だから das Kind に冠せられた冠置詞でしかない。しかし，分詞を冠置された名詞と分詞自身との間には述語と主語の関係が存在している。定動詞の形が述語と主語の関係を表現する公式の形とすれば，分詞の形は定動詞の形に準じている。従って分詞 weinende は則ち，das Kind が目的語であるが故に有しているところの名詞の特質を変質させ，das Kind を主語つまり百%主体に変えている。蓋し4格目的語 das Kind の後方に潜む壱%の対象要素を，分詞 weinende が担うからである。

分詞の形が定形に準ずるということのより明確な証左は Partizipialsatz（分詞構文）という用語であろう。文章を構成する構造形式は正式には定動詞の形でなければならない。形式の面でたしかに分詞の形では文章を構成できない。がしかし内容の面では文章に等しい，つまり定形に準ずる，というのが〝分詞構文〟の意味であろう。Das Kind kam, sich die Augen rot weinend, von der Schule heim.（目を赤く泣きはらしながら子供は学校から帰宅した）における sich die Augen rot weinend は定形に準じて ……，indem es sich die Augen rot weinte, ……という（従属）文章に等しい。定形 weinte が文章の公式の形ならば，分詞 weinend は文章の準公式の形である。従って weinend は weinte と同様に，もし es（=das Kind）が目的語であったなら有していたであろうところの（代）名詞の特質を変質させ，es を主語つまり百%主体に変えている。蓋しもし目的語であったなら es の後方に潜んだであろう壱%の対象要素を分詞 weinend が担うからである。

Er ruht seine müden Glieder aus.（彼は疲れた手足を休める）の müden は形容詞ではあるが，分詞 ermüdeten, ermatteten におきかえることができる。müden のように〝どうなっている〟的形容詞は結局，分詞の場合（例えば das weinende Kind）と同じである。müden と seine Glieder の関係は Seine Glieder ermüden.（もしくは sind ermüdet.）である。従って〝どうなっている〟的形容詞 müden は則ち seine Glieder が目的語であるが故に有しているところの名詞の特質を変質させ，seine Glieder を主語つまり百%主体に変

えることは，das weinende Kind の場合と同じであることは云うまでもなかろう。

次に〝どんな〟的形容詞を眺めてみよう。In der Altstadt gibt es enge StraBen.において enge と StraBen の関係はほぼ In der Altstadt sind manche StraBen eng.（旧市街には狭い通りがけっこうある）である。文章，従って述語であることの形式の上での証明は定形 sind であるが，内容の点から視れば sind は述語つまり文章としての用を殆ど成さない。内容の点で殆ど用を成さないのなら述語内容詞（述補語）eng を補完してやらねばならない。だから述補語 eng は内容面での述語である。故に In der Altstadt gibt es enge StraBen. における enge と StraBen の関係は，内容の上での述語・主語関係である。定形が述語・主語の公式な形であるとすれば，〝どんな〟的形容詞とそれを冠せられた名詞の間にある内容上の述語・主語関係は，公式な形に準ずると云える。定形に準じて〝どんな〟的形容詞 enge は則ち，StraBen が目的語であるが故に有しているところの名詞の特質を変質させ，StraBen を主語つまり百％主体に変えている。蓋し 4 格目的語 StraBen の後方に潜む壱％の対象要素を〝どんな〟的形容詞 enge が担うからである。尚 4 格目的語 StraBen は無冠詞ゆえ，定冠詞と同様百％主体壱％対象である。

以上定形，分詞，〝どうなっている〟的形容詞及び〝どんな〟的形容詞，それぞれの場合を見てきたが通ずる点を要約するなら，1．述語であること　2．述語であることにより，片方で主語を創り出すということ　3．主語は目的語即ち（代）名詞から創り出されるということ　4．目的語即ち（代）名詞は，主体（静止・沈黙）か対象（変動・敍述）かのいずれかであるということ。もし主体なら対象がその後方に潜むということ。これを〝主体百％対象壱％〟ととりあえず表現する。これは定冠詞及び無冠詞（及び定代名詞）の場合であるということ。とりあえず以上である〔が「逆にもし対象なら主体がその後方に潜むということ。これを〝対象百％主体壱％〟とする。これは不定冠詞（及び不定代名詞）の場合である……云々」はこのあとの論証の予定である〕。ここまでの点に関する限りでは定形，分詞，〝どうなっている〟的形容詞及び〝どんな〟的形容詞はいずれも共通している。がしかしその一方で，〝どんな〟的形容詞のしかも不定冠詞を冠せられた場合に限ってそれとは別に，自余には見られない大きな差異を見せ始める。

共に〝どんな〟的形容詞，enge 及び ländlichen, kleinen がそれぞれ冠置されているが，In der Altstadt gibt es enge StraBen は無冠詞（複数）であるし，Ein Mädchen, jung und schön, lebte in einem ländlichen, kleinen Dorf. は不定冠詞が冠せられている。そして ländlichen, kleinen と einem Dorf の関係はいわば Ein Dorf ist ländlich und klein. であろうから，enge と StraBen の間の関係と同様，述語・主語の関係である。ただし einem Dorf は不定冠詞が冠せられているので対象百％主体壱％である。つまり（einem Dorf の）後方に主体が潜んでは居るが，einem Dorf 自身は対象だ，ということである。その einem Dorf が占める対象百％という座を ländlichen, kleinen が占めて肩代りをしてしまう結果，

einem Dorf の中の対象百%は，みずからの背後に潜む主体壱%の方に押し出され，遂に主体の座を占めてしまうに至る。つまり einem Dorf の百%の対象要素を ländlichen, kleinen が担うため，押し出された対象要素が，壱%の主体要素を遂に百%主体，つまり主語に変えてしまうのである。即ち ländlichen, kleinen は einem Dorf が目的語であるが故に有する名詞の特質を変質させ，einem Dorf を主語つまり百%主体に変えている。このようにして目的語を変質させ主語に変えるというだけのことならば，既述の定形 kam，分詞 weinende，〝どうなっている〟的形容詞 müden，〝どんな〟的形容詞の enge と差異はない。ところが，目的語を変質させて主語に変えるだけなく，〝目的語そのもの〟を生み出すとなれば，ländlichen, kleinen 則ち〝どんな〟的形容詞に不定冠詞が冠せられたときだけに限られる。in einem ländlichen, kleinen Dorf において ländlichen, kleinen が目的語 einem Dorf を主語に変質させることはこれまでで一応判るとして，それ以前にまず ländlichen, kleinen が目的語 einem Dorf そのものを産み出す，というのはどういうことであろうか。

ländlich も klein も典型的な〝どんな〟的形容詞であるが，それは差詰ここでは〝どの〟的形容詞並びに〝どうなっている〟的形容詞に対立する概念である。例えば vorliegend, folgend, nächst, heutig, gestrig, link, recht, nördlich, südlich, japanisch, deutsch, Kantisch, Goethesch などは〝どの〟的形容詞である。また〝どうなっている〟的形容詞というのは，形容詞が行為ないし状態を表はす場合である。従って分詞から生まれたものがその典型である。例えば Wir trösteten niedergeschlagene Kinder の niedergeschlagene（意氣消沈した）は一時的な状態である。多少なりとも永続的に子供達が具有する性質ないし特性であっては困るのであり，早く元氣になってもらはねばなるまい。又 alle anwesenden Personen の anwesenden は 1 回きりの行為であろう。それに対して ländlich や klein は特性・特質・外見・風采・風景・景観・風貌・色形（色彩と形姿）と云った多少なりとも永続的であるところの性質ないし姿内容ではなかろうか。Ein Mädchen lebte in einem entlegenen (abgelegenen) Dorf の entlegenen や abgelegenen（人里離れた，隔絶された，辺境の）も〝特性〟というよりもむしろ位置を表わす〝状態〟として区別すべきであろう。abgelegenen が Das Dorf liegt weit ab. であることからもわかるように，〝どうなっている〟型は行為・動作ないし状態であるので，動詞から派生するところの分詞形容詞が最も多いのは当然であるが，たとえ分詞形容詞でなくても Er hat seine müden Augen geschlossen. の müden は ermüdet（疲れてる）という状態を表しているのであって，Er hat ein müdes Gesicht. の müdes（いかにも疲れたような色艶のない顔）にみられるような外観様子を表す場合とは区別すべきであろう。abgelegen（人里離れた）という意味では〝どうなっている〟型ではあっても，人里離れて在れば当然備わってくるであろう一風独特の einsam（人気のない），fremd（よそよそしい），ländlichen（ひなびた）という外観様子の意味ならば〝どんな〟型になるかもしれない。又 dringende Probleme といえば〝さし迫っ

てくる焦眉の〟という動作が本来であろうが，そのような問題は重大な（wichtig）性質をもっているかもしれない。このように〝どうなっている〟型は様子・外観・印象・ときには特性特質を表はすこともあるが，それはあくまで状態ないし動作・行為に付随する様子・印象・特性であって，本来はやはり状態ないし動作・行為である。

〝どの〟型というのは，形容詞とは名ばかりで，実際は〝形容〟ではなく〝指示〟〝指定〟であり，いわゆる〝具体化規定〟である。die heutige Sitzung とは言うが Die Sitzung ist heutig とは言えないのを見ても判るとうり，heutig は述（補）語になりえない。つまり目的語を変質させて主語に変えることができないので，形容詞であっても〝形容〟ではない。〝どの〟型は〝指定・指示〟であってもはや〝形容〟ではなく，〝どうなっている〟型は本来〝動作〟ないし〝状態〟を表はすとすれば，本当に〝形容〟というにふさわしいのは〝どんな〟的形容詞である。

〝形容〟という語の意味は，文字通りに取るなら形（ナリ）・姿と，内容・中身であろう。ある漢和辞典に依れば形容詞とは「事物のありさま性質等をあらわすことば」と在る。又〝形〟とは「かた，かたち，かたちづくる，かたどる，さま，すがた，容姿，ありさま，状勢」等々。更に又〝容〟とは「い（入，容）る，物を器に入れる，かたち，すがた，ありさま，かたちづくる，かたどる」等々と在る。これらの解説を併せて考えれば〝形容〟とは〝性質等の中身内容によってかたちづくられあらはされたすがた，ありさま，かたち〟ということになるであろう。例えば Ich stehe vor einem wichtigen Problem. の einem wichtigen Problem は〝重要な（性質をもった）問題〟であるが，ところで，この〝どんな〟型形容詞 wichtig は（勿論そのような性質をもった）何らかの〝かたち〟を要求する傾向を本質的に持っていないであろうか。Problem 以外に例えば Ich stehe vor einer wichtigen Aufgabe とか，Arbeit とか，Nachricht, Persönlichkeit, Entscheidung 等々。又 in einem ländlichen, kleinen Dorf の ländlich や klein も又その本質上とりあえず何らかの〝かたち〟を求めはしないだろうか。何らかの〝かたち〟というのは Dorf の他に例えば in einem ländlichen, kleinen Badeort（ひなびた小さな温泉保養地で）とか，Städtchen（小さな田舎町で）とか等々である。このように性質（wichtig）や外観・様子・感じ・印象・色あい（ländlich）や形状（klein）を表はす形容詞〝どんな〟型の内奥においては，その性質等の中身・内容が，外観・様子・感じ・印象・色あいといったかたち・すがた・ありさまを人の脳裡に〝かたち〟づくったりあらはしたりするという性向が，本来的に秘められていないだろうか。則ち〝どんな〟型はその赴くところやがて必然的に人の想像の裡に，ひとつの像・すがた・形象となって結実・凝結・凝固しないであろうか。要するに〝どんな〟型形容詞はその行先において不可避的に，ひとつの形姿となって縁取りされ，輪郭が固まって，イメージ（像）が明確に浮かび上がって来はしないかということである。

〝どんな〟的形容詞によって人の頭の中，心の中に形造られた像，浮彫りになっていく構

図，輪郭が固まって明確に縁取りされる形姿，これが不定冠詞〝ein〟である。〝どんな〟的形容詞によって人の頭の中に輪郭が〝固まる〟のであるから，不定冠詞 ein は〝固まり〟則ち〝個〟であるにちがいないが〝数〟ではない。数えるためには個（体）が必要であるがしかし，〝個〟であるからと云って〝数〟える必要は全くない。だから不定冠詞は〝個である〟と言えるが〝数である〟とは言えない。ただ〝個〟が〝数える〟ということに利用される場合にのみ，不定冠詞 ein は数字の〝いち〟として利用されるに過ぎない。〝数える〟ことに利用されない限り不定冠詞 ein は常に，決して数字つまり〝壱個〟ではなく，単なる〝個〟にすぎない。〝数詞の壱個から不定冠詞が生れる〟とはところでよく耳にするところである。しかし〝壱個〟があっての〝個〟ではなく，〝個〟があっての〝壱個〟であるならば，はじめに〝個〟（不定冠詞）が在って，〝壱個〟（数詞）はその後に〝個〟（不定冠詞）より生まれると云うべきではなかろうか。

〝壱個〟（＝数詞）から〝個〟（＝不定冠詞）が生まれるとすれば，等しく数詞である〝弐個〟や〝参個〟から〝個〟（＝不定冠詞）が生まれないで，なぜ〝壱個〟からのみ生まれるのであろうか。その訳は「多くの同種のもののうちの一見本を意味するのが出立点である」[1]（下線は引用者）と関口存男（以下著者と呼ぶ）は云う。しかしそれには根拠がないように思はれる。というのは「多くの同種のもののうちのいくつか（複数）の見本」を取り出してもいっこうに構はない筈である。著者の不定冠詞論の中心を貫いているのは明らかに〝質の含み〟であるが，〝質の含み〟を持たすためには「多くの同種のもののうちの一見本」に限定せねばならぬ必然性があるだろうか。「多くの同種のもののうちのいくつか（複数）の見本」でも，それどころか「不可算の見本」であっても〝質の含み〟を持たすことが可能ではなかろうか。Ich habe *ein Buch (Bücher, Wein)* gekauft.—— Was für *ein Buch*（*Bücher, Wein* いずれも可）ist（sind）das？において「一見本」（ein Buch）のみならず「複数の見本」（Bücher）及び「不可算の見本」（Wein）も同じように〝質の含み〟を持っているからこそ Was für……？（どんな種類の……？）と尋ねたくなるのではなかろうか。にも拘らず ein Buch のみに限定し，Bücher や Wein を除外する（とまでゆかなくとも〝質の含み〟を，前者の第一義的に対して後者は第二義的にしか認めない）必然はあるのか。著者に依ればあたかも偶然の経緯からそのような結果になったかのような印象を与える。筆者はしかし必然性，少なくとも蓋然性があると思う。その根拠は，突飛なようだが，数詞の壱から不定冠詞が生まれるのでなく，その逆ではないかという疑問の中に存在する。

不定冠詞 ein は（〝どんな〟的形容詞の作用により，人の脳裡や空想や印象の中にやがて明確な形姿として凝縮される）〝個〟であり，この〝個〟（＝不定冠詞 ein）があってはじめて〝数える〟（＝数詞 eins, zwei, drei……）ことが可能なのだから，初めに〝個〟（＝不定冠詞 ein）有りき，次いで（その〝個〟を前提に）数詞（zwei, drei,……と同様 eins も又数詞にちがいない）有りき。まさかその逆に，数詞例えば eins が初めに在って，その後に，

〝個〟則ち〝不定冠詞〟が生まれる，などとは只今の所考え難いのだが，問題は筆者のこの見解がところで，〝質の含み〟を ein Buch のみに限定する必然とどんなつながりがあるかということである。この関係はいずれ後になって解明せざるをえないとし，順序として先ず，不定冠詞 ein は〝個〟であるということと，そしてその〝個〟が〝どんな〟的形容から生まれ出るということがどのように不定冠詞の本質を規定していくかを考えてみたい。

〝どんな〟的形容詞はその属性として，人の脳裡，印象，想像の内にやがてなんらかの形象となって固まり，姿，輪郭が浮彫にされていく（という性質を本来的に備えている）ということは既に述べたとうりである。〝どんな〟的形容詞は，固まってなんらかの形象となり，やがてその姿，輪郭が浮彫になるということは，〝どんな〟的形容詞は〝固まり〟つまり形象を生み出す，ということを意味する。このことは又更に次のことを意味する，則ち〝固まり〟（＝〝個〟）を生み出せばその形容詞は〝どんな〟的形容詞である，と。〝固まり〟（＝〝個〟）を生み出さなければ〝どんな〟的形容詞以外のものであることは云うまでもない（，がしかしだからと云ってかならずしも即，前に対置したことのある〝どの〟的や〝どうなっている〟的形容詞であるということではない）。さてところで，〝個〟が生み出されているかいないかを識別する目印は何か。それは不定冠詞 ein の有無である。不定冠詞 ein が有りさえすれば，〝個〟がまちがいなく生み出されているのだから，そこに在る形容詞はかならず〝どんな〟的であらざるをえない。たとえ〝どの〟的や〝どうなっている〟的形容詞であっても〝どんな〟的形容詞としての機能を余儀なくされる。それどころかいかなる形容詞も一切無かろうとも，それでも必ず〝どんな〟的形容詞を想像想定しなければならない。(2) 〝どんな〟的形容詞（もしくは広義にとらえて〝どんな〟的規定）なくして〝個〟（＝不定冠詞 ein）は決して生まれない筈だからである。

こうして不定冠詞 ein とは〝個〟を意味し，その出所は〝どんな〟的形容詞であるが，それでは更に不定冠詞の源流である〝どんな〟的形容詞について若干考えてみたい。

In der Altstadt sind manche StraBen eng. の eng が〝どんな〟型であることは既に詳述したとうりである。eng の文中の役割は述語 sind を補完する述補語である。定形を中心とする形式の面からはたしかにそうかもしれぬ，が内容を重視するなら述語は eng の方であって，人称変化しないのがむしろ不思議なくらいである。まさか ich enge, du engst, ……, manche StraBen engen という訳に行かぬので sind を補ってやらざるをえないのだが，sind は単なる形式上の補いにすぎず，事程左様に eng が述語である。

Das Kind kam, sich die Augen rot weinend, von der Schule heim. の rot は〝どんな〟型である。人称変化できないので形式の点では述語ではないが，内容の点では Die Augen waren rot. であるから堂々たる述語であり，もし云えるものなら die Augen roteten と云いたい位である。

Er schwimmt gut.（彼は上手に泳ぐ）の gut は〝どんな〟型である。内容的には Er ist

gut im Schwimmen. であるから，gut はやはり eng や rot と同様に内容重視の点から見れば述語であり，schwimmt は補足語（目的語）にすぎない。schwimmt が述語と言えるのは定形（形式）重視の視点に立つときのみである。

Ich finde den Film interessant.（私は映画を面白いと思う）の interessant も〝どんな〟型である。Ich finde, daB der Film interessant ist. であるから interessant は述語であり，ist は形式的補完にすぎない。

Ein Mädchen, jung und schön, lebte in einem ländlichen, kleinen Dorf の jung und schön は〝どんな〟型である。これは Ein Mädchen, das jung und schön war, lebte in einem ländlichen, kleinen Dorf. であるから jung und schön も interessant と同様に述語である。

以上いくつかの例を挙げたが〝どんな〟的形容詞はどれを拾ってみても，動詞のように人称変化させたくなる程に立派な述語（敍述）である。その証拠に主語が必ず別個に存在（顕在もしくは伏在）している。主語が別個に存在するのは〝どんな〟的形容詞を除けばあとは動詞のみである。この際の〝動詞〟というのは定形は勿論，分詞（構文），又結局分詞の一派生と見なされる〝どうなっている〟的形容詞，稀に不定形（例えば Die alte Frau fühlte ihren Tod nahen.の nahen など）をも含む。結局動詞を除けば〝どんな〟的形容詞だけが唯一の〝敍述〟（述語）である。

不定冠詞 ein とは〝個〟を意味し，その出所（源流）は〝どんな〟的形容詞であるが，その一方〝どんな〟的形容詞というのは〝敍述〟であり，いはば〝人称変化しない動詞〟である。生れが〝敍述〟いはば〝人称変化しない動詞〟からであるので従って〝個〟つまり不定冠詞 ein（の本質）は〝敍述〟である。

第 8 項で取り上げた Die Schulerin legt ein Buch auf den Tisch.を例にとるなら，不定冠詞 ein は〝個〟を表はし，かつ〝どんな〟的形容詞（たとえ明記されていなくとも）から生まれるので〝敍述〟である。従って ein の後におかれる Buch というのは，〝どんな〟かの特性特質，〝どんな〟かの様子外観，あるいは〝どんな〟かの色形から輪郭を次第に（もしくはただちに）顕はにし，やがて（もしくはすぐに）Buch という明確な形姿となって固まる〝動作〟であり，〝変化〟であり，〝敍述〟である。

唯一動詞と同じ様に，主語を別個に持っている堂々たる述語の〝どんな〟的形容詞であるが，動詞に比べて人称変化だけはすることができない。しかしその分だけ動詞ではなしえないことを果すことができる。〝明確な形姿となって固まり，不定冠詞 ein を生み出す〟という〝動作〟〝変化〟〝敍述〟こそが正にそれである。しかもそれだけに停まらず，そのことをさらに越えて，〝動作〟〝変化〟の対極の〝静止〟にまで至り，〝敍述〟の対極の〝沈黙〟までも生み出すに至るのである。則ち〝どんな〟的形容詞から〝明確な形姿となって固まり，不定冠詞 ein が生み出される〟瞬間は，〝変（化）動（作）〟〝敍述〟を通して〝静止〟

〝沈黙〟というものが〝はじめて生れる〟画期的瞬間である。つまり〝目的語〟の誕生である。

〝静止，沈黙〟がはじめて生れ，それによって目的語が誕生するが，ein Buch の出自が〝どんな〟的形容詞だから ein Buch はどこまでも〝変動，敍述〟である。これまで使ってきた表現に従えば対象百%である。〝沈黙，静止〟は ein Buch の外部には見当らず，従って ein Buch の後方に潜むとしか考えられないのでこれまでの表現に従って主体壱%である。目的語はこうして不定冠詞と誕生を共にする。

Ein Buch では〝どんな〟的形容詞が明記されていないが，明記されている例を使って同じ事柄を辿ってみよう。

Ein Mädchen lebt in einem ländlichen, kleinen Dorf. において ländlichen, kleinen は〝どんな〟的形容詞である。〝どんな〟的形容詞から生れるので einem は〝敍述〟であり，かつ〝個〟を意味する。つまり einem を冠せられた Dorf は ländlichen や kleinen から輪郭を次第に顕はにし，やがて Dorf という明確な形姿となって固まる〝変動・敍述〟である。しかし，ländlichen, kleinen についてはそれが〝敍述・変動〟であり，いわば〝人称変化無き動詞〟であることは頷けるが，〝einem〟とりわけ Dorf については，語感の上で受入れ難い抵抗感が抬頭して来ないだろうか。もし抬頭して来るならそれこそまさに正しい感覚である。なぜならその抵抗感こそが kleinen を通してはじめて生れる〝沈黙・静止〟の存在を証明しているからである。einem Dorf はたしかに〝敍述・変動〟である。なぜなら ländlichen や kleinen から生れるからである。既に使ってきた表現を使えば百%対象である。しかし壱%は逆に〝沈黙・静止〟である。というのは einem Dorf の外に主語が見当らない。外部に主体が見当らなければ einem Dorf の後方に潜んで居るとしか考え様がないからである。einem Dorf は結局対象（＝敍述，変動）百%，主体（＝沈黙，静止）壱%である。たとえ壱%とはいえ沈黙，静止，主体というものが茲に初めて生れることの意義は極めて大きい。それは〝目的語の誕生〟を意味するからである。つまり〝目的語の誕生〟は不定冠詞によってもたらされる。その不定冠詞は〝どんな〟的形容詞から生れる固まり（＝個）であるので結局，目的語は〝どんな〟的形容詞から誕生する。〝どんな〟的形容詞は〝固まり〟（＝個　＝不定冠詞）を生み出すと同時に目的語を生み出す。但し，生み出される〝目的語〟と〝固まり〟は別物ではなく，同一物 einem Dorf である。

対象百%主体壱%という云い方は，飽くまで敍述・変動でありながらしかもそれと対立する沈黙・静止が，その後方に潜んでいるということの表現である。名詞がこのようにして一方が対立するもう一方の後方に潜むのは，目的語（２・３・４格）のときにしか起り得ないことで，主語及び述補語（１格）のときには有り得ない。そしてその〝一方が対立するもう一方の後方に潜む〟という目的語 einem Dorf は ländlichen, kleinen を通して初めて生れるのである。「ländlchen, kleinen が目的語 einem Dorf を主語に変質させるだけ

ではなく，それ以前にまず，ländlichen, kleinen は目的語 einem Dorf そのものを産み出す」と前述したのは，このことを指してのことである。

ländlichen, kleinen から生み出されるので目的語は飽くまで敍述・変動であり，対立する沈黙・静止の方は einem Dorf 後方に潜んで居り，文字音声として形に現れない。たとえ後方に潜んで居てもしかし〝居る〟ことは〝居る〟のである。文字音声として形に現れていなくとも〝在る〟ことは〝在る〟のである。それではこのまちがいなく存在する〝沈黙〟を文字音声として形に表はせないだろうか。〝沈黙〟を〝文字音声〟として表はすのは矛盾かもしれない。しかし〝文字音声〟に依る以外にどのような表現方法があろうか。〝沈黙〟を表現するのには所詮文字に印し，音声に発せざるをえないものなら，同じ「文字に印し音声に発する」としても〝沈黙〟とは無関係の，例えば und や auf といった接続詞や前置詞の類ではなく，〝沈黙〟とは少しでもつながりのあるものを使ったら如何であろうか。そこで少しどころか密接なつながりがあるものとして，対（立）関係にあるところの〝敍述〟つまり名詞が使われる。名詞例えば Dorf は従って，これまで見てきたように〝敍述〟として使われるだけでなく，それとは対立関係の〝沈黙〟を表現するのにも使われる。Dorf に einem が冠せられておれば Dorf は〝個〟（数ではない！）であり，従って〝どんな〟的形容詞から生まれることになるので〝敍述〟である。それでは Dorf が〝沈黙〟を表はす時はどのような手順が待っているのであろうか。それは折にふれ既に随所に繰返したとうりである。

Dorf が沈黙を表はす場合にその扱いはふたつの方法に分かれる。そのひとつは〝指す〟方法である。Er hat sich zwei Tage in dem Dorf aufgehalten.（彼は村に 2 日間滞在した）の dem Dorf は特定の村を〝指し〟ている。〝指す〟というのは著者に依れば「時間空間規定によって一点に追い詰められ……三千世界にただ一箇だけしか有り得ない」[3] 物となるので，「三千世界にただ一箇だけしか有り得ない」Dorf の上に話し手の目が止まっている，大袈裟に言えば釘付けになっていることを意味する。Dorf に目を〝付け〟（付着させ）たり，目が〝止まる〟ということは〝静止〟であって〝動き，変化〟ではない。〝沈黙〟であって〝敍述〟ではない。〝話し手〟の凝視々点つまり〝主体〟であって〝対象〟（事象）ではない。だから Dorf が〝沈黙〟を表はす場合には〝指し〟てやればよい。〝指す〟のだから指示代名詞から派生した定冠詞を冠することは云うまでもない。

Dorf が沈黙を表はす場合の今ひとつの扱いは〝名称を挙げる〟方法である。著者の言を借りれば〝掲称〟である。Die schweizerische Redensart : *zu Dorfe gehen* “in Gesellschaft gehen” hat sich in der zerstreuten Ortschaften gebildet, wo Dorf den Mittelpunkt des Ortes mit der Kirche und dem Wirtshause bezeichnet, wo man sich Sonntags trifft. [4] の *Dorfe* 及び Dorf は，一定の役割を果す集まりとその場所のことを通常どう呼んでいるか，いわば〝名称〟を表はしている。家が疎に散らばった集落では，教会や料理屋飲み屋

が在るその土地の中心部分を Dorf と云い，日曜日に人々がお祈りや歓談飲食や会合打ち合わせ等でそこに集まってくることをスイスの慣用語で zu Dorfe gehen（〝寄り合い〟にゆく）と云うのである。〝名称〟を単に〝挙げる〟だけで足りず，高々と仰々しく〝掲げる〟こと，いわゆる〝掲称〟というのは著者に依れば〝合言葉〟である。〝合言葉〟というのは〝符合する言葉〟であろうから，Dorf あるいは zu Dorfe gehen という言い回しを使う地域の人々には，この語を耳にすればその特殊な意味合いが，誰にも付合一致してすぐに判るであろう。「〝ひとことで用の足りることば〟はすべて何等かの意味における合言葉である。合言葉とは一種の合図である。極端に言うならば標識である。」(5)「此の〝一言で用は足りる〟という説明形式をよく記憶にとどめて頂きたい。……すなわち一言で用が足りるとき二言は用いない，冠詞が附け加わると二言になる，かかるがゆえに冠詞は用いないのである。」(6)

ところで冠詞を用いない（無冠詞付）Dorf や Dorfe のように，名詞が〝掲称・合言葉〟的局面におかれる場合 der Fleck “Dorf”（Dorf と呼ばれる場所）とか，zu der Stelle “Dorf” gehen（寄り合いの場へ）とかいうように引き伸して解釈することができる。この場合 Dorf は der Fleck や die Stelle の〝云い換え〟であるので，著者の言を借りれば換言的規定と呼ぶ。というのは一般的に言えば ein Fleck, eine Stelle だが，具体的に〝云い換え〟れば Dorf だからである。さてところで換言的規定では，規定を受ける Fleck や Stelle が必ず定冠詞を冠することから判るように，換言的規定 Dorf は〝沈黙・静止〟であって〝敍述・変動・出来事〟ではない。だから Dorf が〝沈黙〟を表はす場合には，ひとつには掲称的局面におけばよい。掲称的局面というのは合言葉的局面であるから冠詞を用いなければよい。

目的語は〝どんな〟的形容詞からまず最初に生れて出る。〝どんな〟的形容詞（例えば ländlich とか klein とか）から生れて出るのでその目的語は〝個〟とみなされ不定冠詞が冠せられる（例えば einem Dorf）。〝個〟というのは〝明確な形姿となって脳裡に輪郭が固まる〟という〝動き〟〝変化〟なので当然〝変動・敍述〟とみなされる。従って不定冠詞を冠せられた目的語 einem Dorf も〝変動・敍述〟とみなされる。ところで〝変動・敍述〟は〝静止・沈黙〟との鋭い対立なくしては存立しない。およそ文章である限りその存立がひとえにそれに懸る，あの永遠にまじわることのない（もし交われば，その瞬間文章が消滅してしまう）対立である。その対立する〝静止・沈黙〟はたしかに何処にも文字音声として形に現れてはいない，がしかし einen Dorf の後方に潜んで厳存しているにちがいない。それが証拠に，einem Dorf がいかに〝変動・敍述〟と云はれても，それを全面的100%受入れることを頑に拒み，それとは逆に不変不動の物，つまり〝静止・沈黙〟であることを主張して止まない物が einem，とりわけ Dorf に取り付いて頑として居座り続け，譲ろうとしないように見える。たとえ einem Dorf の陰に伏せられて形に見えなくとも，〝静止・沈黙〟は厳然と存在し，einem Dorf との鋭い対立を堅持し，einem Dorf の変動，敍述性を可能

ならしめている。他ならぬまさにその(einem Dorf と永久に交はることなくどこまで対立し，しかも einem Dorf の存立を可能ならしめるところの）〝静止・沈黙・主体〟を表はすものこそが〝指す〟こと及び〝名称を掲げる〟ことである。〝指示〟及び〝掲称〟というのは従って〝静止・沈黙・主体〟を表はす手立であるので，定冠詞及び無冠詞は〝静止・沈黙・主体〟の世界から生まれ出て来る。

Er hat sich zwei Tage in dem Dorf aufgehalten. の dem Dorf 及び zu Dorfe gehen の Dorfe はそれぞれ定冠詞，無冠詞なので共に〝静止・沈黙・主体〟である。それにも拘らず einem Dorf と同じような〝敍述〟に見えるとしても，無理からぬ話である。〝沈黙〟を表はすのに本当に〝黙し〟ていたのでは〝沈黙〟にならない。矛盾を冒して〝敍述〟に依る以外〝沈黙〟を表現する手立はない。だから〝敍述〟に仮に見えたとしても本当に〝敍述〟と思ってはいけない。実はそれと逆の〝沈黙〟なのである。Dem Dorf などはとりわけ又，あたかも einem Dorf と同じ〝対象〟であるかのごとく見えるとしても，実は逆に〝主体〟なのである。〝対象〟の形をとることによってしか〝主体〟を表現することが出来ないだけのことである。

dem Dorf 及び Dorfe が実は〝沈黙〟であるというなら〝敍述〟はどこに在るのか。〝敍述〟なくして〝沈黙〟は存立しない筈だから。しかしいずこにも文字音声として形に現はれて居ない。たしかに形には現れていない。だがしかしやはり einem Dorf の時と同じ様に，dem Dorf 及び Dorfe の後方に潜み，その陰に伏せられて厳然と存在しているのである。

文章が存在する限り永遠に交わることなく，どこまでも対立するふたつの相反する要素，敍述・変動・対象と沈黙・静止・主体のうち，不定冠詞は前者から生れ出で，定冠詞及び無冠詞は後者を表現する。

Was für *ein Buch (Bücher, Wein)* hast du gekauft？の斜体部分 3 個の名詞の間にどんな差位があるだろうか。ein Buch は〝どんな〟的形容詞から生れ出てその延長線上に有るので，文字通り〝性質〟〝感じ〟〝印象〟〝色あい〟を尋ねている。〝どんな〟的形容詞とは出自を逆にして Wein は，〝沈黙・静止・主体〟の領域から生れる〝掲称〟であるので Wein の種類の〝名称〟つまり〝何という種の〟という意味合いの方向に傾かざるをえないであろう。Bücher も一応 Wein と同じ〝掲称〟である。しかし〝数〟は〝掲称〟の中でも特殊な分野を構成するので，項を改めることにしたい。そして本項は，Bücher はたしかに ein Buch と同じく性質・感じ・印象・色あいを尋ねているがしかし，それは飽くまで〝数〟という〝掲称〟を通してのことであり，結局 ein Buch とはやはり出て来る根が異なり，げに似て非なるは，相反するあのふたつの要素であること指摘するに留めたい。

註

(1) 関口存男 「冠詞 第二巻 不定冠詞篇」 第2版 昭和47年 三修社 2頁
(2) 関口存男の不定詞論の中心を成す考え方であるが，このことを次のように表現している：「ein という不定冠詞は理の当然として was für ein？という疑問を挑み出す。」
(3) 関口存男 「冠詞 第一巻 定冠詞篇」 第5版 1978年 三修社 21頁
(4) Hermann Paul : Deutsches Wörterbuch 6. Auflage Max Niemeyer Verlag 1968 Seite 136
(5) 関口存男 「冠詞 第三巻 無冠詞篇」 第5版 1978年 三修社 4頁
(6) 同上 2頁

〔続〕(1995 10 31)